

## にがてでもだいじょうぶ

(原文)

杉本 賢太郎 (7 歳)

石川県

金沢市立小坂小学校

「おはよう。」

「……………」

きょうしつにはいつてきたともだちに、「おはよう。」といっても、ぼくのともだちはにこにこしているだけです。ぼくのともだちは人まえでおはなしをするのがにがてです。だから、よくだまりこんでこまったかおをしています。ぼくがはなしかけても、なにもこたえてくれないから、ぼくのあたまの上に「大きなハテナ」が出てくるときもあります。ぼくはおはなしをするのが大好きだから、そんなともだちの気もちがさいしょはぜんぜんわかりませんでした。

それなのにせきもちかくて、せのじゅんでならぶとぼくがともだちのまえになったから、いつのまにかいつもいっしょにいるようになっていました。そして、いまではながい休みじかんになると、おにごっこをしてあそんでいます。ぼくがさいしょにおにになっておいかけて、タッチしたらじゅんばんにおにになっておいかけて、タッチしたらじゅんばんにおにになってはしまわります。二人ではしまわっていると、ほかのともだちもくわって、どんどんなかまがふえて、みんなであそぶこともあります。

そんなとき、きよねんのなつ休みによんだ「なずす、このっぺ？」というえ本をおもいだしました。虫たちが、虫たちのことばでおはなしをしているえ本は、はじめてよんだときにはなにをつたえたいのかよくわからなくて、「おもしろくないな」とおもいました。それでも、なんどもえ本をよんでいるうちに、虫たちのひょうじょうやどうさから虫たちの気もちやいいたいことがわかるようになりました。

気もちやかんがえていることをそうぞうするときに、ことばばかりを気にすることがおおいです。でも、ぼくは、ともだちといっしょにいるようになってから、ともだちのかおを見ていると気もちがだんだんわかるようになってきました。ことばだけではなくて、ひょうじょうやどうさもよく見て、あいての気もちをわかろうとすることが大じなんだとおもいます。

ぼくのかんがえるやさしさは、にがてなことこまっている人がいれば、その気もちをわかってあげてそっとたすけてあげることです。とくいなこととにがてなことは、みんなちがいます。にがてなこととはまわりのだれかがその気もちをわかってあげておてつだいをすれば、にがてなこともあまり気に

ならなくなるとおもいます。

これからぼくもにがてなことが出てきて、くるしい気持ちになることがあるかもしれません。でも、そんなときはきっとまわりのだれかがぼくの気持ちに気づいてたすけてくれるはずです。だから、そのぶん、ぼくもまわりの方の気持ちがわかって、そっとおてつだいができる人になりたいとおもいます。そして、おたがいにながてなことをたすけあうことで、やさしさあふれるしゃかいをつくっていきたいです。